

セメント新聞

発行所 セメント新聞
東京都中央区京橋3-12-7
電話 (03) 3535-0621(代)
URL http://www.cement.co.jp
購読料 1力年 41,470円
©セメント新聞社 2017

長瀧 東工大の瑞中受章祝う

「がむしやらに研究した」



ツセージを紹介し、受章の喜びと家族や関係者に感謝の意を表した。

富田氏の開会あいさつに続いて、叙勲申請書類の取りまとめ役を務めた岩波光保東工大大学院教授が乾杯を首唱。約1時間、長瀧氏の受章を祝つての歓談を行い、続いて丸山久一日本コンクリート工学会会長、上村克郎元建築研究所理事長、前田又兵衛元前田建設工業社長、篠田佳男日本コンクリート技術社長(発起人)、長瀧氏の長男・重博氏の5氏が祝辞を述べた。

重博氏は現在、宇宙物理の世界に進んでいるが同氏が進路を決める時期に長瀧氏に来客があり、その客との話の中で重博氏に聞かせるように「自分と同じ世界に進めばサポートできるのだ」と語ったエピソードを紹介。「土木の世界に進んでいけば常に父親を意識していたと思う。いまの世界に進んで正解だった」と語った。

「1965年は本学土木工学科に初めて2年生として学生を受け入れた年です。そのため、建物を始め研究設備など何も無い状態から学科が発足しました。しかしそれは、逆の見方をすれば、伝統や先達に拘束されず、自由に研究テーマを選べることに繋がります。おかげで、若者に任せて研究室の人たちががむしやらに研究することができました。家庭で食

事するのは日曜の、子供たちの教育も家内に任せっきりでした。しかし、このことで研究室の若い人達との連携が強まり、教育・研究の成果が上がると共に、後継者も育ち、現在、北海道から九州まで20名を超える研究室卒業生が大学の研究者として研究を続けており、他大学の教授から羨ましがられています。また、企業においても研究畑を志望した卒業生が多



長瀧名誉教授を受け取る花束を、右端は久枝夫人。

くみられ、学会の開催地ではいつも楽しく研究室の卒業生と酒を酌み交わ

しながらの議論が今でも続いています。このような研究環境を許していただいた関係者並びに家族にお礼を申し上げたいと思います」

その後、教え子の加藤絵乃海上・港湾・航空技術研究所港湾空港技術研究所構造研究領域構造研究グループ長が出席者を代表して花束を贈呈。鈴木健一鹿島専務執行役員による三本締めで閉会となった。